本居宣長の國語學

松尾捨治郎

一

國學には、大體、

一、古の語及び歌文の研究

二、歴史及び有職の研究

三、古の道(神道)の闡明

の三方面があつて、契沖・成章・景樹の如きは、一を主とし、信友・與清の如きは、二を主とし、令世・篤胤の如きは三を主として居る。春滿・眞淵・宣長は何れにも偏せず全體に亘つて、古の語を明かにし、古の書を讀み、古の道を體得することに力めた。此が特に三大人と稱せられる所以であらう。故に宣長を國語學者として取扱ふのは、其の一面の認識に過ぎないので、宣長の本意とする所では無からうが、單に此の一面から見

ただけでも、其の學識の卓越して居るのに、驚嘆せざるを得ない。

然らば宣長の國語學史上に於ける功績如何といふに、

1　音韻學上に於ては、我が國語の母音の性質を明かにし、鎌倉時代から誤り來つた、お　を　の所屬を正し、濁音が我が國語に於ては、二次的發生の者であることを說き、又我が國の地名に用ゐてある、字音の漢音・吳音にあらざる者を說明した。(漢字三音考　字音假字用格　地名字音轉用例)

2　てにをはの形式(係結)及び語義の研究を體系あらしめ、語の活用についての基本知識を全からしめた。(紐鏡　詞の玉緒　御國詞活用抄　玉霰)

3　語源の解釋よりは、古語の用法を歸納的に研究することに力めた。(玉勝間　玉の小琴　等)

人或はてにをは乃至係結の範圍を誤解して、宣長の研究は國語法の一部分に過ぎないと見る人もあるが、其は大なる誤であつて、當時のてにをはといふのは、大槪博士などの言ふ所とは、全然違ひ、今日の助詞・助動詞・接尾語等のみでなく、極めて廣範圍に亘る者である。此は宣長の著書を熟讀すれば勿論のこと、其の門人鈴木朗の名著言語四種論に天爾乎波を分類して、

1　獨立の者(感動詞)　　あゝ　あはれ　等

2　詞に先つ者(副詞)　　はた　いで　等

3　中間に來る者(助詞)　に　を　の　等

4　結となる者(助詞・助動詞)　かな　す　が　も　等

5　活語の終に附く者(語尾)　行く　有り　青し　等

6　詞の下に來て切れも續きもする者(助動詞)

としてあるので、極めて明かな如く、あらゆる語法的現象に關する者である。

一方所謂漆等語と稱せられる我が國語に取つては、語のつゞくこと(係)　切れること(結)　が、研究の最大重點である。形式方面の重點が此に存することいふまでもなく、其のつゞく語　結ぶ語の語性內容を論究すれば、我が國語のあらゆる語法的現象を、之に含ませることが出來る。さればこそ我が國、語法書の嚆矢ともいふべき天仁波大概抄　同抄之抄　姉小路手似葉傳　等何れも天爾乎波の係結と其の意義との研究に手を染めたのであつて、此が我が國語法研究發生の自然乃至當然の現象である。宣長は實に此の立脚地からの研究、卽ち外來の西洋流語法は勿論のこと、漢語法の影響を、些かも蒙らない我が國生粹の語法研究を大成したといへる。後に鶴峰戊申が和蘭語法によつて國語法を說いて以來、明治年間全盛を極めたのは、西洋流の語法である。成章・腹・義門等の語法說は、或點に於ては、宣長に勝れ、或は宣長の說を補成して居るが、成章の四品詞說も漢語法の影響が若干認められ、腹・義門・等の體言・用言・乃至助辭といふ術語等も、漢語法の影響がないではない。此の漢語法の影響は、西洋語法の影響程ではないが、宣長の生粹な御國風を、此等の者に比較する時、一種のなつかしさ誇らしさを感ずるのは、記者一人のみではあるまい。

二

眞淵や士淸は動詞の活用を、五十音圖に配して、說明しようとしたが、四段活だけが其の認識に上つたらしく、上二段　下二段　等については、何等說く所がない。宣長は御國詞活用抄に於て、活用言を二十七會に分つて居るが、今日の分類を、之に當てると、大體(　)內の如くである。

第一會——第六會(四段活)　第七會——第十五會(下二段活)

第十六會——第二十四會(上二段活)　第二十五會(上一段活)

第二十六會(久活)　第二十七會(志久活)

四段活　下二段活　等の名稱こそ用ゐて居ないが、其の分類は頗る當を得て居る。然るに某氏の國語學史に「宣長も上二段　下二段　を四段活と對等の地位につくべきものとは、更に氣が附かなかつた」と評して居るのは先賢を冒瀆するも甚しい。

人或は宣長が用の言・動かぬ言　とは稱したが品詞を分類せず、活用形に對しても、終止　連體　等の名

を下さなかつたのを見て、學術研究の過程が其處まで進んで居なかつたので、其の研究によつて得た概念が明かでないから命名し得なかつたのだと解する者もあるやうである。しかし、此は現代の（むしろ西洋の）學術觀に捉はれた批判であつて、宣長が何事にも漢意を忌み、こちたき名義を嫌ふ學風によることを忘れての批難ではあるまいか。品詞の分類を試みなかつたのはともかくとして、宣長がきるゝ言　つゞく言（八衢では體の言につゞく）といつて居るのは、終止　連體　といふのに比して、概念構成の判明の度に何等劣る所がないと信ずる。

宣長の國語學の學風について特記すべきことが、更に二三ある。契沖によつて築かれた國語學は單に倭字正濫抄の力が然らしめたのみでなく、非常に假名遣を重んずるのが常態であつた。其は歌文を正しく書く上に於て重要なばかりでなく、萬葉を解する上に重要な職能を發揮して居るので、縣門の諸子も皆之を重んじた。宣長も玉勝間に、

假字づかひは近き世明らかになりて、古學する限の人は、心すめれば、をさ〳〵あやまることなきを、宣長が弟子共のつねに歌かきつらねて見するを見るに、誤のみ多かるは又いかにぞや……わづらはしくともそれしるせるふみを、かゝむ度毎に開き見て、たしかに浮べすはやむべきにあらず。

と諭して居るのでも、明かであるが、宣長は假名遣を重んずる以上に、活用といふことを重んじたと見えて、同じ項の中に、

抑てにをはのとゝのへなどは初學の力及ばぬふしある物なれば、あやまるも罪ゆるさるゝを……

と述べて居る。假名遣尊重の學風は、同門の春海より、其の門下の濱臣に傳はり、活用尊重の學風は、宣長より春海を經て、義門に傳はり、濱臣對義門の論爭の具體化したのが、指出の磯　磯の洲崎　の兩書である。

宣長の學風の一特色が、其の啓蒙を忘れない點にあることは、多くの學者によつて說かれて居るが、次の如きことも、其の一つのあらはれと見られよう。成章のあゆひ抄はをを分類して、

- を
  - 何を
    - 第一例　輕きを（普通のを）　花を・月を・
    - 第二例　重きを
      - 一　名・脚結・の下　色は一つを、
      - 二　裝の下　道は遠きを、
  - 何てを・何とを・何にを（命令・未來・の上）　ぬれてを行かむ。
  - 何ものを　重きをの二に同じ。　思ひしものを、

といふやうにして居るが、宣長の玉緒には

一　つねのを　花を　月を

二　やすめ辭におくを　　ぬれてを行かむ
三　ものをの意のを　　色は一つを
四　にに通ふを　　人を別れて
五　一つのを　　逢ふ事を長柄の橋

と平面的に分類して居る。就中にに通ふをといふのは俗解であり、一つのをといふ分類は雜駁の嫌がある。玉勝間「言の然いふ本の意を知らまほしくする事」の條に「語源の研究に苦心するよりも先づ古の用法を明らめ知るべし」といふ趣意を說いて居るのも、此の學風のあらはれと見るべきである。

三

以上は宣長の國語學についての概論であるが、以下少しく其の著**玉鬘の內容**について解說を試みよう。特に此の書を選んだのは、他の書に關しては其の當時より今日に至るまで、種々の解說や批判が試みられて居るが、此の書は啓蒙的の者である爲か、今日では他の書程には顧みられて居ないからである。但し本書の出た寬政四年に僧竺愷は玉鬘論を書き、淺草の里人は玉鬘附論を書いて、之を論難して居る。此の二書が板刻されたのは、二十三年後(宣長歿後十四年)の文化十二年であるが、其の翌年には、宣長の門人で本書の序文を書いた三井高蔭が辨玉鬘論を書いて、之を反駁して居る。又中嶋廣足が玉鬘怨の小篠を書いて玉鬘を補足して居る、等のこともあるが、現代に於ては、他の書程には、重視されないやうに見える。(富樫廣蔭の玉鬘さめてのすさびといふ書も、寫本で傳つて居るさうであるが見ることを得ない。)

玉鬘は啓蒙的の書である其の一面に於て、語學全般に亘る小敎科書であるから、語法說の全貌を一覽するには、却つて都合のよい點がある。尙此の書の性質に關しては、其の序文以外、玉勝間に、

宣長近き頃玉鬘といふ書をかきて、近き世にあまねく誤りならへる事共を擧げて、初學の徒を諭せるを、宣長が弟子として、何事も宣長が言に從ふ輩の、其の後の此ごろの歌文に、此書に出せる事どもを猶誤ることの多かるは、如何なる僻事ぞや。此の書用ひぬよそ人はいふべき限にあらざるを、其だに心敏きは、うはべこそ用ひざる顏作れ、げにと覺ゆる節々は忽に悟りて、私かに改むる類もあるを、まして宣長が敎をよしとして、從ひながら改めざるは、此書讀みても、心に止まらず、やがて忘れたるにて、そは元より心にしまず、等閑に思へるからなり。

といつて居るので、其の國語學說の結晶とも見られることが明かである。此の玉鬘に含まれて居る條項は、歌の部六十五項、文の部四十五項、計百十項であるが、之を品詞別にすると、大體

1　名詞・代名詞・に關するもの　二十
2　副詞に關するもの　九

3　動詞・形容詞・に關するもの　三十三
4　助動詞に關するもの　五
5　助詞及び接語に關するもの　二十四
6　敬語に關するもの　九
7　其の他大體論・混合說・等　十

と分つことが出來る。此等の所說の中注意に値するものを左に紹介しよう。

四

名詞　代名詞　に關しては、紙面の都合上之を略するが、唯一つ述べたいものがある。あがたは單なる田舍の意ではなく、任國を指すのであるといふ說は、蓋し動すべからざるものであつて、之によれば、その師眞淵の號縣居といふのは、不合理となるのに、宣長が之に言及しなかつたのは、聊か皮肉の感がある。

副詞　に關する者の中、そのかみ　やがて　なほ　とても　かつ　それ　等の說は異とするに足らない。とみに　が打消の語と呼應するといふ說は、春海の織錦舍隨筆に（玉鬘窓の小篠に春海がとはすがたりにあるは誤）

宣長が玉鬘にとみにといふ詞は、下に打消の語のくる樣にいへり。……枕草子に

とみに物もとむるに見出でたる（嬉しきものの條）

たゞ今めせば、とみにて上へまゐるぞ。（打解くまじき者の條）

などあるは、宣長はいかで忘れけむ。

と皮肉な評を下して居る。春海の說が正しいけれども、其はむしろ例外に屬することであつて、原則としては宣長の說の通である。

いと　いたく　の別を說いて「いと戀し　いと悲し　とはいふが、いと戀ふる　いと悲しむ　とはいはない。之に反して　いたく戀ふる　いたく悲しむ　とはいふが、いたく戀し　いたく悲し　といはない。」といふのは、卽ちいとは形容詞に副ひ、いたくは動詞に副ふといふのである。義門は、話語餘論に　夜いと更けぬ（枕草子）　いと心を盡して（繪合）　等數例を擧げ、廣足は窓の小篠に　いと此程の嘆やはせし　いとかゝる雪はふらすかし　等の數例を擧げて、之を補訂して居る。此も義門・廣足・の說が詳しいけれども、原則としては宣長說を認むべきであらう。

よりては因るといふ動詞から出來た者であるから、語頭によりてとおくことはないといふのが、玉鬘の說である。石川雅望は、その著ねさめのすさびに三代實錄の「……と申す。仍りて……」「疑ふべきことなし。よりて……」等の例を擧げて之を駁して居り、廣足も之を補つて居る。此亦古文の原則としては、玉鬘に從

ふべきである。

動詞の自他及び受身使役に關する研究は、春庭の詞の通路によつて、基礎づけられた者ではあるが、其の端を玉緒に發して居ることは、疑ふべくもない。卽ち玉緒に說いてある所を表にすると、

項序	自ら然る	他を然らしむる
14	そひ　そふ	そへ　そふる
15	まがひ　まがふ	まがへ　まがふる
16	かはり　かはる	かへ　かふる
17	見ゆる　見えて	見する　見せて
59	見ゆ	見

此の自ら然る　他を然らしむる　の二別が通路の六類となり、義門の自然・使然や戊中の自動　動他　を經て、明治に入つて田中義廉の自動　他動　となつたものである。なほ玉緒には、たのめ　たのむるとたのみ　たのむ　の別も說いて居る。其の他春を迎ふ　妻を迎ふ　落葉して　いふこと然り　某處に遊ぶ　等が漢文風であること、申越の越は宛字で實はおこせであること等も說いて居る。

助動詞に關しては、三つのいひざまの項中に咲くが現在　咲けるが完了　咲きしが過去　であることを明かにして居る。現在　完了　過去　といふ命名はせずして、(1)今　(2)であること　(3)前の事を後にいふ　といふ說明ではあるが、要領を逸しては居ない。特に『さけるの代りにさくを用ゐるが、其の逆は用ゐない。さける　さきし　の區別はあるが、記者の觀點如何によつて「此の序は……貫之のかけるなり」「貫之の書きし時」共に正しい』といふが如きは、今日の專門家の說に比しても遜色が無い卓見である。之を補つた窓の小篠の說を參照すれば、現在・完了・過去・の說明は略完成した者といへる。

つる　ぬる　の區別に關する說明だけは要領を得ないが、現今尙學說が區々に別れて居ることを考へれば、玉緒を咎むべきではない。「有つるとのみいひ、有ぬるといふことなし」と說いて居るのも、原則としてはよいが、有ぬべし　有ぬやといふやうな例は可なり多く、土佐日記には「かゝることなほ有りぬ」といふ例もあるから、やゝ獨斷に近いと評せざるを得ない。

「ましはん又べき　べし　といふと大かた同じ意」といふの說は、成章が、まし　とまし物と同意と說き、うものといふに語を當てて、御杖が反實想像の意を發見する示唆となつたのに比して物足らない。

五

助詞　**接尾語**　等に關しては、古くは天が下とはいはず、天の下とのみいつたことやと　ものから　ゆ

がり　どち　や　もぞ　もこそ　等に關する說も、後學を益すること少くないが、特に注意すべきは次の數項である。

だに　すら　さへ　の別を說いて、其の時代的變遷に著眼し、「古今集よりこなたはすらの意をも共にだにといへり。」といふのは、義門が眞宗聖敎和語說に「古今の時分以後は　さへ　だに　の二つあつて、すらといふ語は少し」といふのと相俟つて、成章の「すらは上代よりありて中ごろの人、ことに好みよめり」といふ說と對立の觀がある。何れを是とすべきか學者のよい研究題目である。

蝶や花やなどいふのは、蝶よ花よの意であるのに、花や紅葉などといつて、花又は紅葉の意に用ゐるのは「やもじかなはざるなり」と說き、玉緒四卷には之を「物二つの間に挿むや」として、同じ趣意のことを詳說して居る。

のみといふ語を、漢文風に語勢の爲に用ゐる（人之を笑はむのみ等）のはよろしくない。古歌古文でものみを結に用ゐることがあるけれども、其は「たゞ一夜のみ」「たゞ一人のみ」の如く二つなき事をいふのであるといふ說は、古事記傳に更に詳しく出て居るが動すべからざる者である。

春にのどけき　秋に見し　等のにはいやしげな語であるといふのは、現代語の　九時出發する　九時に出發する　今やむ　今に止む　等の語感の相異にも應用すべき說である。

「てもじ足らぬ語」と題して、「花咲きて人ぞ見に來る」といふべきを「さくらさき人ぞ見に來る」といふのはよくないといふのも、緻密な卓說であつて、現代學者中にもてを輕視する人のあるのに思ひ比べられる。てに關する私見（拙著國文法論纂所載）も、實は此の項に啓發されたもので、深く敬意を表して居る。

古今集の詞書の

「門よりしもえいらで、かきのくづれより、通ひたるを度重なりければ云々」

等のををがの意に解し「之を知らすしてがとのみいふは雅たらず俗言に近し」と說いて居るのは、反戾のを　が　相通ずる者と解したのであらう。其の說、稍明かでないが、後學に對してよい研究題目を與へたことは爭はれない。

本書の開卷第一に

月淸み……瀨を早みなどの類のみは、本意を委くいはゞ初學の輩中々にまどひぬべし。たゞ近くいはゞ月が淸さに……瀨が早さにといふ意なり。をもじあるもなきも意は同じ

と說いて居る。遠鏡の口譯も大體その如くなつて居る。此の說が廣日本文典に取られてから、みを故にの意の接尾語、をを感動詞と考へるのが通常となつた。しかし此の說の當否は疑はしい上に、宣長の創見が、由つて來る所があるかも、考究を要する。私見では此は成章のあゆひ抄に

詞の本は裝のむ末（動詞の語尾む）をおこせる（い列に變化せしめた）者なり。しかれば　うとむ　したしむ　などを里　うとがり　したしがり　といふに當れども、すぐに當つべきにあらねば、さにと里す

と說いてあるのから得來つた者で、其の前段は、宣長の所謂本の意を解いた者で、なか〳〵に初學を惑はすから之を省き、後段の口譯だけを取つた者かと思はれる。

「やすめ詞のしもじ……近き世に道しある世など多くよむ、これら道しあればといふときはしもじ優なるを、下をあるといふところにおきては、こちなく聞ゆるなり」といふのも、あゆひ抄に

中昔より後にはかならずぞ　は　こそ　か　も　等をしにつゞけるか、さうでなければ、何ばと受ける。

卽ち名にしおはゞ　名におふ　共に正しいが、名にしおふといふべきではない。

とある說を取つたのか、或は暗合か、とにかく合致して居る。

六

敬語に關してはきこゆが奉るの輕い意であること、人の名を指していふのは、今の世では無禮なこと、給ふは與へる意、給はるはもらふ意であるといふ說など何れも動すべからざる者である。但し「給はるは古き物には被賜とかきたり」とあるのは、給ふの受身と考へたのであらうが、普通の給はるは良行四段の他動詞、受身の給はるのは下二段的助動詞であつて全然別の語であり、且受身下二段の給はるの方は、普通に用ゐられない。此の誤は案外廣く行はれて居るやうであつて、本居だけを咎むべきではない。

つかはすは動詞自體に尊敬の意があるから、遣し給ふとはいはず、遣さるも受身としては用ゐるが、遣すにのついた敬語として用ゐることはないといふ說も動すべからざる者である。

侍るを「己が上につきたる事にそへていふ」と說くのは、聊か物足らない。「語る人が己の　見　聞き　思ふ　事にそへていふ」と說きたい。又窓の小篠の如く草子地にも稀には用ゐられる。しかし「口語のましてまして　ござります　に當る。撰集の詞書に多いのは、奏上の物だからである。拾遺集は花山法皇の御撰であるに拘らず、侍りの多いのは、精撰に至らなかつた爲であらう。新古今に多いのは、其の時代には用法が亂れたのであらう。家集中侍りの多いものは、尊貴の人の御覽に供する下心があつた爲、少いものは何となく書き集めた爲である」といふのは、其の卓見に敬服せざるを得ない。

給ふと坐(ま)すとの共通相違兩面を說き、「入ります　かへります　はよいが、宣ります　諭します　等は誤である。」といふのも、動すべからざる說であつて、現代口語のますの語源を坐すとする學者に對する戒ともならう。

右の外**文字あまりの句**といふ一項は、和歌の文字あまりは阿行音を含んだ者に限るといふので、宣長の於乎所屬論の八證（1通音　2地名字音轉例　3一音二字定例　4略音　5字餘り　6謠物餘韻　7字音開合　8悉曇字母）の一である。しかし此は玉篋附論に西行の霽分くる袖のや風になびく等を擧げて難じて居り、義門の於乎輕重義にも之を捨てゝ取らない。其の方が、今日の定說となつて居る。

七

斯の如く宣長の所說は、後世の進步した學說からいへば、瑕疵も少くはなく、又他の說を取つて、之を自家藥籠中の物とした者も少くはない。しかし其の瑕疵は、卽ち白璧の其であつて、後の學者に研究の示唆を與へた者であり、他の說を取つて、之を平易に說いたのは斯學を集大成し、之を弘通せしめる上に役立つたので、むしろ宣長の地位を高めたといつてよい。就中其の國語學の特徵の第一が、我が國生粹の者を大成した點にあることは忘るべからざる者である。

昭和十一年四月六日印刷
昭和十一年四月八日發行

本居宣長研究（道義論叢第三輯）

定價壹圓八拾錢

編輯者　東京市澁谷區若木町　國學院大學道義學會

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目九番地　青年教育普及會　代表者　井田耕治

印刷所　東京市牛込區西五軒町五十二番地　青年教育普及會印刷所

複製不許

發行所　東京市神田區一ツ橋教育會館內
電話九段（代表）四一五一番
振替口座東京一二七七番

青年教育普及會

目次

日本精神史上に於ける本居宣長翁……文學博士　河野省三……（一）
本居宣長の人生觀……文學博士　田中義能……（九）
本居宣長の國語學……松尾捨治郎……（一六）
國文學研究史上に於ける本居宣長……文學博士　武田祐吉……（三三）
本居學の運命と要求……松永材……（四〇）
本居宣長と固有道德の闡明……岸本芳雄……（一〇三）
本居宣長の神觀・神道觀……小野祖教……（一二〇）
外人の觀たる宣長論……安津素彦……（一八三）
本居宣長のものゝ理解のしかた……西田長男……（二一〇）
附錄　本居宣長文獻目錄